

教 仏 名 聞

第54号
(発行日)
2015年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉 --1月2日休
毎月2日と12日午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

無明の闇を破するゆえ

無明の闇を破するゆえ

智慧光仏となづけたり

一切諸仏三乗衆

ともに嘆誉したまえり

(語句)

無明―― 真理に無知であつて、煩惱の根本原因。

智慧光―― アミダ仏の光明の徳の一つで、衆生の迷いを除き真実にめざましめる光。

三乗衆―― 声聞、縁覚、菩薩という聖者たち。

(現代語訳)

いただいた真実信心の智慧のはたらきは、暗き迷いの心(無明)を破り、ついには無明を除いて下さる。こうした信心の智慧となつて下さるアミダ仏の徳用を智慧光と名づけられる。このアミダ仏の徳を一切の仏方や聖者方(三乗衆)はともにほめたたえたもう。

○ このご和讃は曇鸞大師の制作された『讚阿弥陀仏偈』の中

《 念佛寺永代経法要 》
四月二十二日 (水)
午後二時始

(朝日カルチャーセンター講師)
星野 親行 師

* 同日 (四月二十一日) 午前十時・勤行法話 (念佛寺住職の法話です)

「仏光よく無明の闇を破す。ゆえに仏をまた智慧光となづけたてまつる。一切諸仏・三乗衆、ことごとくともに歎誉したまえり」

のご文をもとに親鸞聖人がうたわれたものです。

このご和讃から、アミダ仏の光に遇う人は、人生(あるいは生存そのもの)の根本的な闇を破られる、それはなぜかと云うと、アミダ仏の光の徳である智慧光の徳をいただくからだと知らされます。

逆に、量りなきいのちであり光明である徳(アミダ)にであわなない生(人生)は、基本的に明るくない、いわば闇だといわれるのでしよう。

人生はそれだけでは闇だといふ感覚は私たちには直ぐにピンとこないかも知れません。しかし、老いゆく身であり、病気にさいなまされ、そして死の淵に追いやられていく生は、苦であり、不安であり、空しさから離れられないのではないのでしょうか。そういう

人生の基調は闇であつて、

「無明の長き夜」にいるようなものではないのでしょうか。

こうした人生の中で、家族の愛情や娯楽やさまざまな好ましい刺戟を得て、この人生苦の中を悲喜苦樂しながら私たちは生きていくのでありましょう。たしかに食べる楽しみ、見る楽しみ、スポーツや仕事の楽しみやおしゃべりの楽しみなどいろいろなもの慰めを得て日々を過ごしているのが私たちです。ただその全体が、無明の闇の中だと仏様は見ておられ、そう告げておられます。

仏教語である(無明)とは、一切の迷いや煩惱の根本原因であつて真実への無知を意味します。

このことは、人生を闇にしているのは、ほかでもない、一人一人の心の中の迷いの心、すなわち無明によつてであり、

その無明の心が人生全体を暗くし、憂苦せしめているのだと、仏法では教えられています。

ということは人生の苦とか憂苦とか闇は、本来は実在しないものであり、迷いの心が生み出したものである、というのが仏教の見方です。

裏から言えば人生は救いがないのではなく(救いはある)ということ。人生は絶望しなくいい。生は(人生は)は明るくなり得る、まことの幸福を得ることができると告げているのが仏法であります。

それで仏法は、人生の憂苦を生み出している無明(迷い心)を離れればいいということです。ですから、仏陀の教えは私たちにとつて大きな朗報なのです。その無明を離れる道が仏道です。

その仏道には、自らの厳し

い修行によって無明を断じて悟りの智慧を完成していこうとする道もあります。

しかし今ここで、無明の闇が破られる道は、人間の修行の力によってではなくアマダ仏の光明（ここでは智慧光）によって破られる法、すなわち本願念仏の仏法について、親鸞聖人は讃嘆されているのです。なぜなら、自分の力や修行によって無明を断じる道は非常に難しく、容易についていけないものではないからです。

聖人は、私たち人間のはかりによってではなく、アマダ仏の智慧光（光明）の力によって無明の闇は破られる、ここに真実の仏法があると表明されました。そしてアマダ仏の光明に浴しなさい、光明にあいなさい、光明（名号）を聞きなさい、とお勧め下さるのです。

話は変わりますが、現代の日本では、宗教はカヤの外に置かれています。ですから、このような尊い法があることが多くの人に知られていないのです。宗教は公の教育では教えられず、それぞれの家庭の営みにまかされています。

自由主義諸国で日本ほど宗

教が疎外されている国はないと思います。なおそれに加え、悪いことに、似て非なる宗教なるものが、宣伝の力によってはやり、それによって自他を害するという事件がいくつかが発生したので、宗教というだけでアレルギーをもつ人が多くなっています。

さて本題に戻ります。「無明の闇を破するゆえ智慧光仏となづけたり」で、アマダ仏の光明にふれると、この仏の光明にはさとの智慧の徳がありますから、私たちの迷いの本である無明の闇が破られると、仰せられるのです。ではどのようにして無明の闇は破られるのでしょうか。

私たちが真宗の教えを聞き、お念仏を申すようになると、アマダ仏の光明（心の光）に知らず知らず、私の心が照らされてくるのです。教えを聞いている本人には知られなくても、教えにあい念仏することとはアマダ仏の光に触れているのです。そうすると、自分の心がどういふものか、どういふ姿かが知らされてきます。そうしてとうとう煩惱の元である無明が、露わとなつてきます。

○

真宗の教えを聞くと、無明はどういう形で私たちに知られてくるかといいますと、アマダの本願を「疑う心」いわば「仏智を疑う心」として露わになつてきます。

アマダ仏の救い（本願）を疑つてやまない心として無明は、私たちを迷いの苦しみ（生死流転）の中に留めてきたのです。私たちが生死流転せしめてきた本体が「仏智疑惑」として、顔を出すのです。

それまでは自分にも分からなかったのです。けれどもアマダ仏の教え（光）にあつて聴聞し、念仏申していくところにそれが露わとなるのです。

こうして本願を疑うしか知らなかった自分の本性（自性）が知れますと、もはや自分には救われる縁も手ばかりもないこと、アマダ仏をつかむことも引き寄せることも、アマダ仏に手出しすることもできない自分であった、すなわち「出離の縁あることなき身」であり「助からぬ身」であることがはじめて知れるのです。

金子大栄先生のお話によく引用された先達の言葉に「疑い晴らして信ずるにあらざ、晴れざるは凡夫の心なり」とあります。これは、本願念

仏の聞法を重ねると本願を疑う心が晴れると思いきや、疑いが晴れず、むしろ本願を疑う心が凡夫の心の本性だと知らされる、との思し召しです。

「本願疑惑の無明煩惱」が私の本質で、アマダ仏に反逆し続けてきた私、アマダ仏に抵抗し続けてきた私、アマダ仏に刃をむけ続けてきた私、それゆえ生死流転してきた私、が知らされるのです。すなわち「助からぬ身」であると同時に、

「助からぬ 身にしみわたる 名名の声」

で、ほかならぬ南無阿弥陀仏はそんな本願疑惑・謗法（ほうぼう）法を否定する）の私のためであつたと身に沁みて感ぜられます。南無阿弥陀仏はまことに「助からぬ者を助けたまい、引き受けたもう」大悲のお力でましますと。

まことに

「たのめとは 助かる縁の なき身ぞと 教えて救う 弥陀の喚び声」

といわれるように、「そんな者を」と喚びかけたもうおはたらきが、耳に聞こえる南無阿弥陀仏のお声なのであります。

聖人の『仏智疑惑和讃』に「仏智うたがうつみふかし

この心おもいしるならば くらゆるところをむねとして 仏智の不思議をたのむべし」とある通り、（仏智を疑うしかない私よ」と、己の罪を知らされ、そこに「そのままの汝を引き受ける」との大悲の不思議によって、不思議にも疑惑の心が破られるのです。すなわち無明の闇が破られるのです。

さて、このご和讃の（智慧光仏）のお言葉に対して聖人は左訓（注）をつけておられます。それは、

「一切の諸仏の智慧を集め給える故に、智慧光と申す。一切諸仏の仏になり給ふことは、この阿弥陀の智慧にてなり給ふなり」

とあります。まず「一切諸仏の仏になり給ふことは、この阿弥陀の智慧にてなり給ふなり」とはどういう意味でしょうか。

その点で聖人は、諸仏たちはどうして仏になられたのか、それは「アマダの智慧」をいだけいて仏になられたのである、と仰せられるのであります。

アマダ仏とは「無量の光明と無量の寿命」のはたらき、

あるいは「無量のいのちと智慧と慈悲のはたらき」と言われていきます。

一切のもろもろの仏様は、無量の寿命と光明なる真実(アミダ)にであって、真実に目覚められたお方だといわれるのです。

ですから一切の諸仏を仏たらしめているような仏をアミダ仏と申されるのでしよう。お釈迦様もアミダ仏の智慧をいただいて釈迦仏になられたといえます。

量りなきいのちと光であるアミダ、それをまた(ダンマ)とも表されています。

『ウダーナ』という經典には釈尊(釈迦)がさとりを開かれるときのことと述べられています。それによりますと、「実にダンマが熱心に入定している修行者に顕わになるとき、そのとき、かれの一切の疑惑は消失する」(『ウダーナ』)

とあって、ダンマ(アミダ)が修行者である釈尊に露わとなったとき、釈尊から一切の疑惑が消えて悟りを開いたと伝えられています。

過去の仏たちも同様でしょう。アミダのいのちと光が露わとなり顕現したとき悟りを開いて目覚めた者(仏)とな

られたのでありましょう。「三乗衆」である声聞、縁覚、菩薩もそういうダンマにふれたお方であって諸仏に連なるお方でありましょう。

声聞は、真理を悟られた仏の近くにおいて聴聞して真理にめざめた方、縁覚とはさまざまな縁によって真理にめざめたお方、菩薩とは真理に目覚めて自らだけでなく積極的に他の者を救うていこうとするお方のことです。

そういう点からいうと、アミダ仏(ダンマ)にふれたお方である法然聖人や親鸞聖人や蓮如上人なども、諸仏とおがれるお方であるといえます。また弘法大師や道元禅師や良寛禅師なども、後世の者にとつて諸仏に連なるお方といつてもよいのでしよう。

さらには、無量のいのちと智慧と慈悲なるアミダは純粋にして普遍的なはたらきでありますから、そういうはたらきにであつた人たちは仏教の歴史の上だけでなく、世界のさまざまな伝統の中に多数出現したと言えます。世界の聖人や賢者と敬われる方々はそういうアミダにふれたお方だともいえましょう。ソクラテス、孔子、イエスキリストなどの聖人、さまざまな智慧

ある賢者もダンマに触れたお方ではないでしょうか。

また過去だけでなく、現在の賢者や未来に出現するであろう聖人や賢者や、さらに娑婆世界以外の領域の目覚めた方々を含めると、まさに一切諸仏は無数とも言えます。

經典にはインドのガンジス河の砂ほどの仏がましますと説かれ、(諸仏阿弥陀)あるいは(無数の阿弥陀)とも説かれ、アミダ仏は(諸仏の中の王)とも説かれています。

このようにして、一切の諸仏や聖者方は、無明の闇を破つて下さるアミダの光(ここでは特に智慧の光)をとともに讃嘆し、おほめになられるとのご和讃です。

アミダにふれた方々は諸仏といえるでしょうから、こうした真理に目覚めたお方たちの智慧はアミダの智慧におさまるのでありましょう。こういう意味を「一切の諸仏の智慧を集め給える故に、智慧光と申す」といわれ、一切諸仏の智慧はアミダの智慧(智慧光)に集約されるといわれるのではないのでしょうか。

そうしてみれば、宗教の違いによって壁を作り、自分の宗教以外を否定し、排除し認

めないばかりか、宗教を異にする集団や民族を圧迫し、排除し、迫害することは、あつてはならないことです。

異なる宗教の人たちは諸仏の伝統の方であるし、その伝統における聖者や賢者にはアミダの徳が表れていると言えます。アミダの功德をそれぞれに表現している方々といえましょう。

ただ、歴史に現れた、アミダの徳を表現している個人的な聖者や賢者たちは、少なくとも(人である限り)、この世でのさまざまな限界や条件の中におかれています。ということは何らかのゆがみや偏りから全く自由であるとはいえないでしょう。排他的になつたり、現世の権力におもねつたり、他の人たちを圧迫したり、自分たちの特殊な習慣や儀礼を強要したりするといった、ゆがみや偏りが起こらないとはいえません。

アミダの徳は純粋で普遍的な真実であつても、それは歴史上の人を通してこの世に表現されてきます。そうすると、人がアミダの徳にふれたとしても、人はさまざまな歴史的環境的な影響の中にあり、また人それぞれの異なる性格

に影響されますから、人を通して語られる言葉や行いには偏りがあつたり、ゆがんだりすることがあり得ましょう。高僧、名僧といわれる人、賢者と目されているお方であっても、この世に生きる時、過ちをおかす危険に常にさらされているのです。

であればこそ、互いにアミダの徳が純粋に現れるように謙虚に学びあわねばならないでしょう。

そういう意味から、純粋で普遍的なはたらきは、この世の歴史を超えて、しかも歴史に働いている寿命無量・光明無量なる善きはたらき(アミダ)のみであるともいえましょう。

(了)

〈遠方法話予定〉

- ① 三月四日(十時始)。名古屋市、名古屋別院。座談有。
- ② 四月一〇日(二時始)・十一日(四時まで)。広島市、龍善寺。
- ③ 四月十七日(十時始)。福井別院。座談有。
- ④ 五月十九日(二時始)〜二十一日(四時まで)。福井別院。座談有。
- ⑤ 六月十三日(十時始)。福井別院。座談有。

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

木村無相さんの法信

30

(昭和五十八年九月八日のお便りの続きです。無相さん七九歳。往生される四ヶ月前のお便りです)

さて、ここで、紀さんの手紙のはじめにかえって、もう一度いただく、

「小生、六月頃より何か今までのハレモノが引いたように、聞法上の苦がなくなりました。信心が得たい、ハッキリさせたいと焦り、もがきもだえていた気分が無くなつてしまつたようです」

とありますが、それが六月頃のこと、それが七月三日の私への紀さんの手紙、

木村さんのイノチである「念仏して」を一直線に歩みます。たとい、多くの人が、それを真宗でないと言つても。

の手紙となつたのでありましょう。

○ たしかにあのころから、それまでの紀さんとは、コロツとかわつたのですね。

将来、又、もがき苦しむかも知れませんが、それと同時に、如来の親心というものが少し身に感じられるようになったようです。

と、つづいて、書いてありますが、その通りだろうと、私にもわかることです。

○ ところが、その次に

ただ最近、仏智疑惑といつことを問題にしております。多少とも、親心が、身に沁みて来たにも、かかわらず、ふと疑いの心が出てまいります。

少しあわてます。

○ しかし、以前のよう、その途端に「ブブブ」と暗黒の中に沈み落ちる「ブブブ」(ブブブ)をいぢまへ。

と、その「疑惑佛智」ブリをアリノママに書いていますね。こういうように、くわしく書いてくれると、遠くはなれていて、「問答」の出来ない私にも、よくわかつてありがたいのです。

○ ここで、紀さんのこの「問い」を、ちょっとはなれて、私の實際をアリノママに書きますから、よく読んで下さい。

紀さんは

「本当に、如来様は、私を引き受けて下さるのであるのか」

と、そのことが問題になるとのこと、その「思い」が問題になるとのこと。

ソコで、私の思うところ、感ずるところを、アリノママに聞いてもらいましよう。

○ たび々々書くが、私は、大正十三年(二十才)の十一月三十日の夜、フトしたこと

が縁になって、自己内面のスガタが一切に見せられ、自己内面のアマリの醜悪さに驚いて、

この煩惱を断じてサトリが開きたいと、思い立ったのであります。(今から言えば、思い立たしめられたというホカないが)

さて、その二十才からいつて今は七十九

才、

「往生」のこと、「生死出離」に関してのことは、私には、もう々々、絶対に力の無いこと、私の力には及ばぬことであります。ただただ「丸々引き受けて、シマツつけてやる」という、如来の、おおせのままに、如来の、よきようにしていただくのほかは無いのであります。

無有出離之縁の私にあつては――。

○ さて、紀さんの最後にこうあります。

信後にもこの私の心に、疑惑の心がおこるのでしようか。そつすると、信後に疑惑がおこるとすると大変なことになる。まことに戸惑いの多い私であります。

とありますが、かりに、信後に「疑惑の心」がおこつたにしても、おこるにしても、地獄に落ちるより以上の大変なことはありません。

出離之縁あることなし、ということ、以上は大変なことはおこりません。聖人の『教行信証』の総序の御文に

若し、またこのたび、疑網に覆弊せられなば、かえりて、また、広劫を徑 歴せん。とあります。

信後に、疑惑がおこるとしても、また、モトの如くに、広劫を徑 歴する以上の「大変なこと」は、おこりません。

○ 『歎異抄』第二条に、

たとい法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候。

その故は、自余の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛を申して、地獄に落ち候わばこそ、「すかさされたまつりて」という後悔も候らわぬ。いづれの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞ

かし。

でありますゆえ、「地獄一定」は一定すみかであり、自性は、詮ずるところ無有出離之縁の、わが身であります故、たとい、法然上人、親鸞聖人、七高僧、釈迦、ミダに、だまされて、念佛して、地獄に落ちても、やはり、出離の縁あることなしであつても、「それ以上の大変なこと」になりますまい。

紀さん、

信後に、疑惑が何百。ペン、おころうとも、何千。ペン、疑惑がおころうとも、所詮、自性は、地獄一定の自分であり、無有出離之縁の私なのであります。

「大変なこと」といつても、「地獄一定」、地獄ユキより大変なこと、出離之縁あること無し、より以上の大変なことはおこりません。すまい。

○ 「信後にドレホド大変なことがおこつても、当然なこと」であります。地獄に落ちればよいではありませんか。また、モトの如く、六道輪廻し、広劫を徑 歴しても、よいではありませんか、モトモトそういう私なのであります。

○ ところが、弥陀に、

「撰取不捨の利益にあづけしめたもうなり」

の大慈大悲のお力があります。信後にどれほど疑惑がおころうとも、どれほど迷おうとも、孫悟空が、もうこまでは、釈迦の力は及ぶまいと、思つても、釈迦の手から、一步も出ていかなかった如くに、

信後にまた、疑惑が千返、万返おこつても、如来の撰取不捨の利益、如来の撰取不捨の御手から、こぼれ出ることは、出来ないであります。

(続)

この場合の諸仏は、「一切諸仏三乗聚」いわゆる一切の仏、声聞、縁覚、菩薩方に通じ、真理を悟って身に付けたお方のことです。

仏とは真理に十全に目覚めてさとりを完成したお方、声聞は悟りを開いたお方の近くにおいて聴聞して真理にめざめた方、縁覚とはさまざまな縁によって真理にめざめたお方、菩薩とは真理に目覚めて自らだけでなく積極的に他の者を救うていこうとするお方とっていいでしょう。

ただここでは仏と三乗衆とを特に区別する必要はないと思います。要するに真理にふれた尊いお方のことである。そういう方々はアミダ仏のお徳をともに讃嘆し、南無阿弥陀仏をほめられる、と仰せられるのです。